

Studio Report

EMS Elektronmusikstudion

～前衛的なスウェーデン国営の芸術施設



Text by kyoka

<Profile>現代の実験／電子音楽の最高峰レーベル=raster-notonにおける、初の女性ソロ・アーティスト。ベルリン～東京を拠点に活動中。その音楽はカオティックかつ直球な一方、ブロークン・ポップ・ビートのダンス可能な要素も含む。国内外の有名フェスに出演を果たしている。

スウェーデン国営の実験的芸術研究施設であるフィルキンゲン (Fylkingen) で知られるストックホルム。この都市にある国営の前衛的な芸術施設はそれだけではない。EMS Elektronmusikstudion (以下、EMS) もその一つで、1964年にスウェーデン政府によって創設された施設である。近年ではマーク・フェルやフランク・プレットシュナイダーなどの電子実験音楽家をはじめ、アコースティック音楽、サウンド・アート、パフォーマンス・アート、インスタレーションなど多彩な分野におけるアーティストたちの活動の中心の場となっている。さらに今年は設立40周年にあたるため、世界各地でEMSの歴史や関連アーティストを紹介する展示、イベントなどが開催された。ちなみに私がこのスタジオを初めて訪れたのは昨年11月。フェスティバルで演奏するためにストックホルムに来た際、わずか30分だけの見学だった。にもかかわらず、この施設の魅力に取りつかれてしまい、今年の2月、4月、8月に約1週間ずつここで滞在制作をし、次回のアルバムはここで仕上げようと現在思っているほどだ。そんなEMSの内部を紹介していきたい。

6つのスタジオと個性豊かなスタッフ

スタジオは全部で6つ。6chサラウンド・スピーカーを備えたStudio1 (メイン写真)。8chサラウ

ンド・スピーカーが用意されたStudio2。いわゆるマスタリング仕様になっているStudio3。ヨーロッパ最大級を誇るオリジナルのBUCHLAが設置され、ここに滞在するアーティストたちが自由に使うことが許されているStudio4。レコーディング・ブースであり、なおかつ他の全スタジオのコントロール・ブースにもなり得るStudio5。SERGEシンセが用意されたStudio6。ちなみに、Studio2/3/4/6のサウンド・システムはインガー・ウィーマンがINO AUDIOスピーカーを部屋ごとにカスタマイズしており (彼のスピーカーは現在も受注生産にて購入可能)、特にStudio2は少しの妥協も無い姿勢で作られている。その他、映像処理専用のスタジオ、機材製作に必要な数多くの道具が保管されるツール・ショップ、そしてサウンドに関するあらゆる書籍を集めたライブラリーなど非常に充実した施設となっている。

私が最も気に入って作業に使っているのは、Studio3と、BUCHLAが設置されているStudio4。2004年以来、EMSのアート・ディレクターを務めるマッツ・リンドストロームも「このStudio3より良い音のスタジオにはいまだかつて出会ったことが無い」と言っていたが、私個人としてもそれは事実だと思えるスタジオだ。ちなみにマッツ・リンドストロームは作曲家でもあり、特に近年はサウンド・アーティストとして非常に高

い評価を得ている。電子音によるパフォーマンス、そして時折、音楽を補完するようにインター・メディアや舞台の要素、ビジュアル・アートを取り入れたライブ・パフォーマンスも行う人物である。劇場やオペラ、ラジオ・アートやダンスの音楽も数多く手掛けてきた。かつては、電子分野のエンジニアとして多種多様な楽器や、光から音を生成する装置をデザイン／構築するなどしてきた。また彼はここスウェーデンにてサウンド・アートの講師もしつつ、世界各国においてサウンド・アートや同国の音楽史についてのレクチャーも行ってきた。

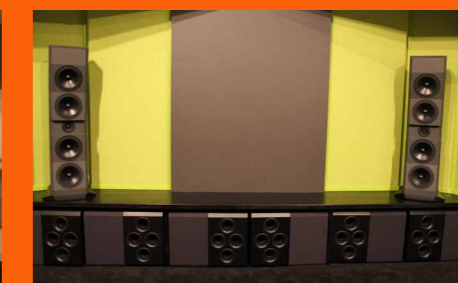
EMSにはもう一人の重要人物が存在する。ダニエル・アラヤだ。EMSに勤めて現在5年目で、1990年ごろに彼はAMIGA 5000の音をサンプリングし、ハウス・ミュージックを作っていた。それから高校時代の3年間、電子工学を学びながら、独学で電子機器やモジュラー・シンセの構築や修理技術を習得。その後、2009年よりダニエルはEMSの正式なスタジオ・エンジニアになった。レーザー、シンセ、CNC、アーティストのための機材設備のカスタムなど、彼はあらゆる技術に精通している。EMSの魅力は非常に高品質な機材や施設だけではなく、ハイレベルな知識と経験によってアーティストの疑問を解決する技量を持ったスタッフの存在も大きいだろう。



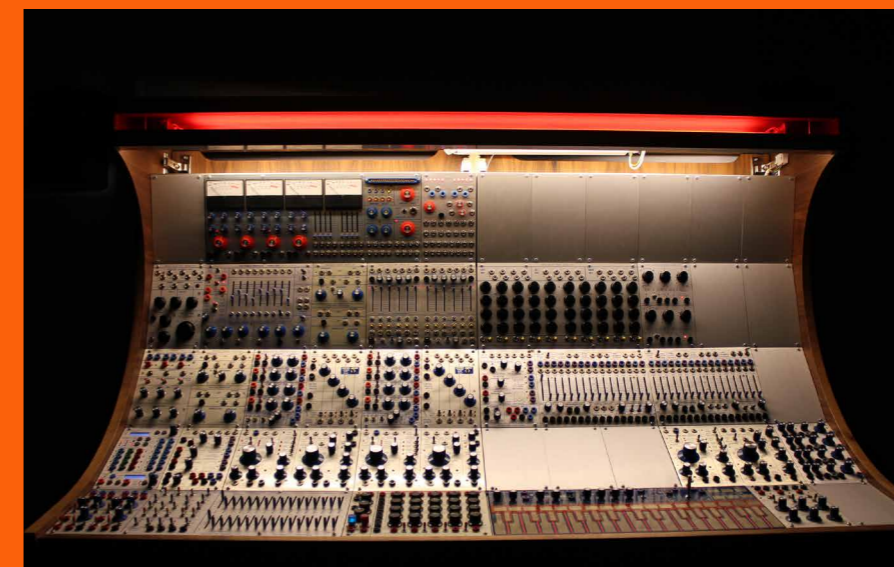
▲1968年当時のStudio1



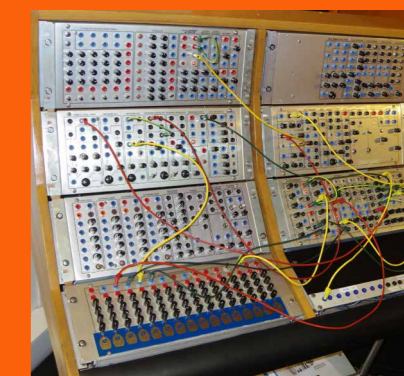
▲会議室。オープン・リールのMTRなどが見える



▲Studio3。インガー・ウィーマンによるINO AUDIOシステム



◀Studio4にあるヨーロッパ最大級のオリジナルBUCHLA 200 System。主にブルー・ノブのモジュールで組まれた2つのシステムを一体化。60ものモジュールが入っており、元は無かったSequential Voltage SourceやMultiple Arbitrary Function Generatorなどをビルト・イン



▲Studio6にあるSERGEモジュラー・システム。BUCHLAと同様、滞在アーティストが自由に使えるのが魅力

欧州最大級のBUCHLAモジュラー

ここで、今年7月にEMSにて滞在制作を行ったフランク・プレットシュナイダーに、このEMSとBUCHLA、SERGEについて詳しく聞いてみたので、以下、彼の言葉を引用する。

「私はEMSをかなり以前から知っていて、ここに滞在した音楽家たちの作品を追ってきました。だからこそ、今回私がこのインスピレーションに満ちた場所に滞在できたのは、とても特別なことでした。私は今回、SERGEとBUCHLAを利用しました。これらはモジュラー・シンセなので、まずはパッチを組んでどうなるかを探り、そのパッチで演奏しながら、さらなるパッチを組んでいく必要があります。音質に関してもソフトウェアとは相当違います。なぜなら、これはアナログ・モジュラーなので、ツマミを回すスペースというものが存在します。ポテンショメーターは非常にレンジが広く、希望のレベルまで非常に精密に回すことができます。まさにこの部分がマウスやパソコンのコントローラーとの違いです。このシステムには良質なシーケンサーが組み込まれていて、Multiple Arbitrary Function Generatorと、もう一つFive-Step Sequencerが入っています。また、Programmable Complex Waveform Generatorにはそれぞれ2基のオシレーターが

組み込まれており、それが3つ用意されています。MOOGのようなシンセに通常あるエンベロープやLFOは付いていませんが、その代わりとして特殊なQuad Function Generatorがあり、それをモジュレーター代わりに使うことが可能です。普通のシンセとは少し作りが違っていますが、使い始めるとすぐに理解でき、とても扱いやすいです。SERGEもユニークで素晴らしいインスピレーションの源でした。ここEMSにあるSERGEは4つのオシレーターと、3つのステップ・シーケンサー (各5/8/16ステップ) から成り立っていて、LP/HP/BPおよび、ノッチ・アウトプットが同時に使用可能な非常にデザインが良いVCFが2基付いています。また、数多くのミキサーとシグナル・モディファイア、非常にチャーミングなディレイ・モジュール、WILSONアナログ・ディレイも付いています」

そして、ここからは私の個人的な意見。Studio3に来てから、実際に聴こえる音が増えた。そしてStudio4のBUCHLAは、本当に機能的だと言うことが分かった。機能面でのデザインを先に決め、それから電気回路が組まれているため、逆に見た目論理的なのだ。さらには、ダニエルによるスバルタ・レクチャーの効果もあり (笑)、ある程度の規則さえ把握すれば、モジュラー・シンセはとても感覚的／アーティストック

な視点から扱うことができるという体験を、EMSでの滞在によって存分に実感できた。SERGEに関しても、先にBUCHLAの特訓を受けていたため、扱いにはそこまで困らなかった。さらに言うと二度、帰国中にDOMMUNEにて即興でClock Face Modular (シンセ・ショップ) からEuro Rackモジュールを借りて演奏したが、どちらもBUCHLAを使った経験があったからこそ扱えたのだと考えている。アーティストの潜在能力をこんなにも伸ばしてくれるスタジオは、滅多に存在しないと思う。

驚くべきことに、このスタジオはスウェーデン国民であれば、すべての人に開かれている。EMSの規定による一定の音楽的訓練を受けて認められた人間であれば誰でも使用のチャンスがある。私のような外国人に関して、EMSが認めたアーティストをゲスト・コンポーサーとして迎え入れている。現地のアーティストが国が認めた海外のアーティストと出会う場を設けるという、とんでもなく懐の深いスタジオだ。結果的にスウェーデンの文化も豊かになっていくのも目に浮かぶ。まさに、正しく「国営」と呼べるシステムではないだろうか。そんなEMSは、今日もマッツやダニエルをはじめ、多くの人間によって進化を遂げている。今後もこのスタジオの発展が楽しみだ。